

BRICS とインドルピー

今週は ECB の金融政策を決める会議があり、0.25%の利下げが見込まれる。ECB は来年も利下げを継続する可能性が高く、市場では 4-5 回の利下げを見込む。FED も今月の FOMC で 0.25%の利下げが見込まれるが、来年は 2 回の利下げに留まる見方が多い。BOE は来週会議の予定だが、政策金利の変更はなしとの見方が多い。

こうした差異はそれぞれの景気やインフレ率に対する見方を反映していて、為替レートの変動も概ねそうした差異を基本的に反映している。例えばユーロポンドではユーロに対してポンドの堅調さが目立つ。

こうした先進国の金融当局の動きに対して、新興国、その代表とも言える BRICS 諸国の中にはまた異なった動きがある。

特にインドでは中央銀行が今年の GDP 成長率予測を 7.2%から 6.6%に下方修正した。これは 7-9 月期の GDP が年率 5.4%の成長に留まったことを受けたものだ。しかし先週の金融政策会議で政策金利は従来の 6.5%を維持した。10 月のインフレ率が目標の 4-6%の上限を超えた数字だったからだ。

そして時を置かず今週初に中央銀行総裁の交代と新総裁の人事が発表された。3 年任期の満了に伴うものだが、本人は再任を希望していた。だがモディ政権内では利下げに踏み切らなかったことに対する批判も根強く、成長鈍化とインフレ上昇の責任を取らされたと見ることができる。

インドは中国が不動産問題や米中対立を抱える中で最も高い経済成長を期待され、海外からの投資も急増した。ところが最近ではモディ政権と親密なアダニ・グループのスキャンダルの発覚などもあり、投資の引き上げも起これり株価も一頃の勢いを失った。ドルルピーは 84.0 を 10 月中旬に超え、直近では 84.85 とルピーの最安値を更新している。

こうした傾向はこれから来年にかけても継続する可能性がある。来年は早々に新総裁の下、インド中銀は利下げをされると思われるからだ。インフレ率が著しく上昇しない前提だが。

為替レートの傾向は他の多くの BRICS 諸国でも似た傾向にある。ブラジルリアルはドルリアル 6.0 を 11 月末に超えた。リアルの最安値だ。財政赤字に対する懸念が主因で、直近は 6.05 近辺で推移し最安値を更新している。政府は赤字削減策も打ち出しているが市場の信頼を得られていない。

ロシアルーブルは 11 月中旬にドルルーブル 100.0 を超えた。ウクライナ侵攻直後と昨年 10 月初に 100 を超えたがすぐに戻した。今週初も 100 を一時的に切ったがすぐに 100 台に乗せた。直近はドルルーブル 102.0 近辺で推移している。ルーブルの 100.0 は市場もそれほどこだわりのあるわけではなく、今後も割れることは何回もあるだろう。

中国の人民元はドル人民元で 7.0 を超えたのが昨年 5 月中旬、以降 7.0 を割ったことはなく直近では 7.2490 で推移している。7.0 はそれ以上の人民元安は容認できないレベルとの認識が当局にあったとされたが、経済的根拠がないレベルだったと元金融当局の責任者が明かした。実際に超えても特に何も起こらなかった。ただ市場の売買量は 7.0 前後で相当量なされたことで、そこが今度はフロアとして大きなポイントになっている。